

漢法苞徳塾資料	No. 549
区分	治療配穴論
タイトル	難経の記述する「積」の治療配穴論を考える
著者	八木素萌
作成日	2002.01.20

I. 導言

9年前埼玉医大医療センターで胃細胞の異形化・変位があることが、胃カメラの像に現れていると告げられた。翌々年には府中の医王病院で胃カメラによる検査を受けた。その際のバイオプシーによる精査の結果、1～2cm程度のポリープがあるので、切除するようにと勧告された。然しOPを断って内服剤による治療と養生という方式に自ら選択して今日に至っている。そろそろ内視鏡検査を受けようかとも思っている。

『難経』56難の積聚記述は、積の成因と病証の解析を明快にしたものであるから、癌・ポリープまた腫瘍・潰瘍などの類を、漢法医学的に特に鍼灸的な治療論を考察する為の良いよすがとなっている。この軌条に沿って考察した配穴論に従って、自分自身への施術を試みている所であるが、少なくとも『難経』が記述している腹症は数回の施術で明らかに改善し、舌症にも好ましい方向の変化が現れ始めている。

したがって、『難経』56難の記述から考察した配穴論について、考察過程とともに記述して見ようと思う。

II. 「積」の病像と病の構造

五蔵の「積」は共通した発症構造をしている。別表に見られるように、直接の成因は外邪への感作であるが、屈折した発症構造をしている。まず五蔵のそれぞれの「積」に関する記述を見てみよう。

「肝積＝肥氣」

病邪を受けたのは〔肺〕である。ところが、〔肺〕は長夏の最も土性の強い時期に「土性の邪」〈湿・飲食労倦・暑湿〉を受けたが、発症していない。〔肺〕は季節的には秋（次の季節）に旺気するのであるから、「旺・相・死・囚・休」という五行の循環局面では「相」の時期に位している。季節的に土性の最も強い時期に「土性の邪」にやられたというのであるから、この場合の邪は明らかな外邪である。

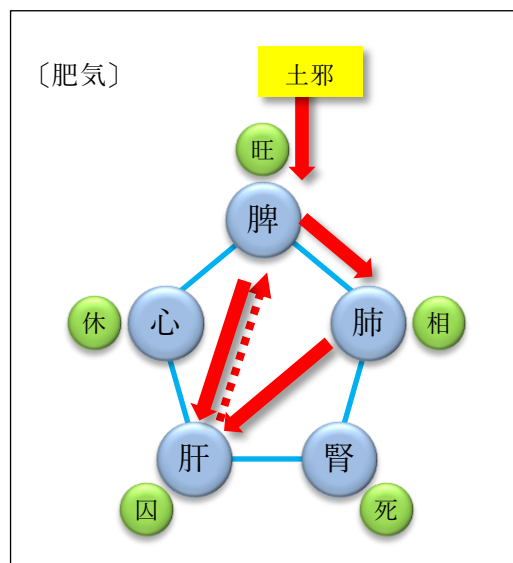
〔肺〕は金性の蔵であり、病邪となっているのは「土性の邪」である。「土」は「金の母」に位しているのので、〔肺〕にとっては「後ろから来る者」で「虚邪」とされるものである。「虚邪」であるから〔肺〕を発症させる力が不足していると解することができる。

〔肺〕はこの「土性の邪」を「己が優位にある」〔肝〕に送った。〔肝〕にとっては己を剋賊している〔肺〕から病邪を転移させられている。故に最も厳しい「賊邪」(金⇒木)となっている状態である。故に、治癒困難な状況下に置かれている。

然し、注意を要する点は、本来なら「肝木」は「土性」を剋賊する立場である。此処では逆に〈湿・飲食労倦・暑湿〉などの「土性の病邪」の侮りを受けているのである。

〔肺〕にとっての「虚邪」＝「土邪」が、〔肺〕を媒介することによって〔肝〕に対する「賊邪」の位相から送られてくる病邪となっている。病邪は「土邪」であるから、同じく相剋性のものであっても、「微邪」に相当している。「土⇒木」のように、〔肝〕は「土邪」に侮られている。「土邪」は〔肺〕を媒介にしているから〔肝〕に乗ずることが可能になっている。2乗的(肺＝金と土邪＝土)に攻撃されているとも言える。

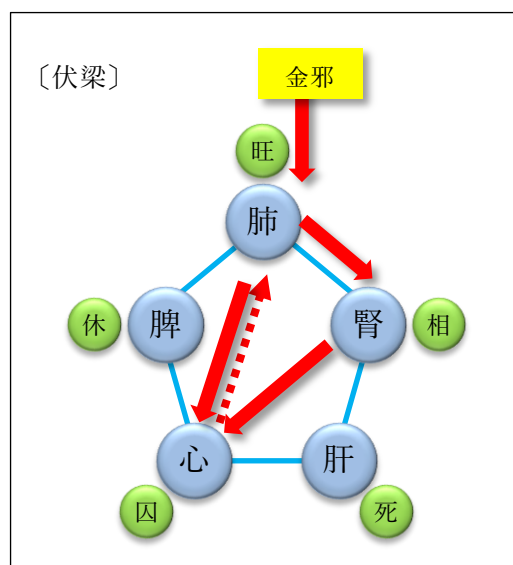
このようになりかなり複雑な関係にある。



「心積＝伏梁」

受邪蔵の〔腎〕(水)は、病邪(金)が「虚邪」であるから発症していない。〔心〕(火)を剋賊している蔵〔腎〕(水)が病邪の媒介者となっている。つまり、〔腎〕(水)が秋の最も金性の強い時期に、「金性の病邪」を受けたが発症しないで、己が剋賊している蔵〔心〕(火)に病邪を送っている。

ところが〔心〕にとって「金」は己(心・火)が剋賊する位置のものである。このように己(火)が剋する立場の(金)から侮られているので、逆なものである。こうして「金性の邪」の侮りと(腎・水)の剋乗を受けて2乗的に攻撃されている。此処でも邪は明らかに外邪である。

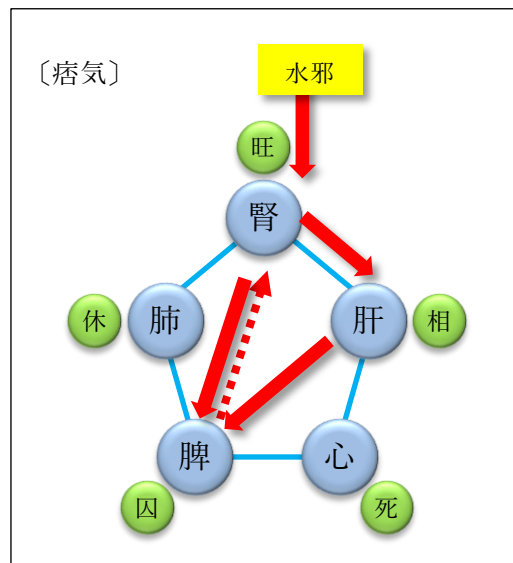


「脾積＝痞氣」

受邪蔵（木蔵＝肝）は、病邪が「水性の邪」で虚邪に相当しているので発症しない。それは〔脾〕（土）を剋賊する立場の「木蔵」＝〔肝〕が病邪（水）の媒介者となっているからである。

「土は水を剋する」もの故に、病邪（水）は「微邪」である。本来なら剋する「土⇒水」の立場にある筈の病邪（水）から逆に侮られている。侮りと剋乗とを2乗的に受けて攻撃されている。

邪は明らかに外邪である。



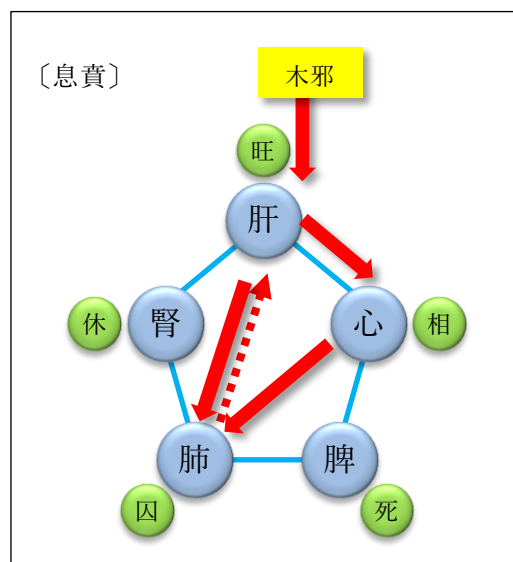
「肺積＝息賁」

〔肺〕（金）を剋する立場「火⇒金」にあるのは〔心〕（火）である。病邪は〔心〕（火）にとっての「虚邪」（風木の邪）である。「虚邪」だから〔心〕は発症しない。〔心〕はこの「虚邪」を己が剋している〔肺〕に送っている。

本来「木」は〔肺〕（金）の剋賊を受ける筈の立場である。〔心〕（火）を媒介蔵にすることで、〔肺〕（金）が「風（木）邪」の侮りを蒙っている。つまり〔肺〕を剋賊する立場にある〔心〕（火）がその「虚邪」（風木の邪）を転移させて、〔肺〕を障害（いたぶって）している。

〔肺〕（金）は「風（木）の邪」から侮られており、また〔心〕（火）を媒介者にした邪（木）から剋賊されている。侮り（木）と（火）の剋乗とを受けて2乗的に攻撃されている。

ここでも邪は明らかに外邪である。



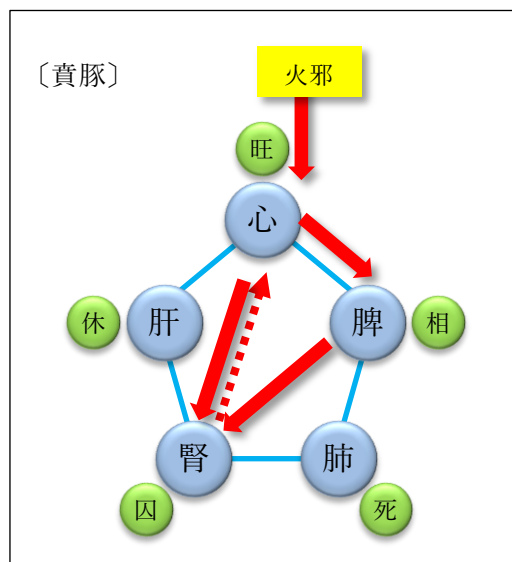
「腎積＝賁豚」

〔腎〕（水）を剋するのは〔脾〕（土）である。〔脾〕（土）が夏（火）の季節の最も「火性」の強い日に「火（熱）邪」を受けたのである。「火（熱）邪」は〔脾〕（土）にとっては「虚邪」であるに過ぎない。故に受邪蔵である〔脾〕（土）は発症しない。そして受けた病邪「火（熱）邪」＝「虚邪」を、己が剋する立場にある〔腎〕（水）に送っている。

本来（水⇒火）は（水剋火）の関係にあるものである。ところが、（火）は〔脾〕（土）を媒介者として、そこにある「（火）邪」を〔腎〕に転移させ、かつ剋賊している。つまり〔脾〕（土）を媒介者とした（火）＝「〔脾〕の虚邪」が、〔腎〕を剋賊する〔脾〕の立場を利用して〔腎〕を障害〈いたぶって〉している。（火）の侮りを受けている。また、〔脾〕（土）を媒介者として（火）の剋賊に甘んじる他はなくなっているのである。

〔腎〕は（火）の侮りと（土）の剋乗とを受けて2乗的に攻撃されている。

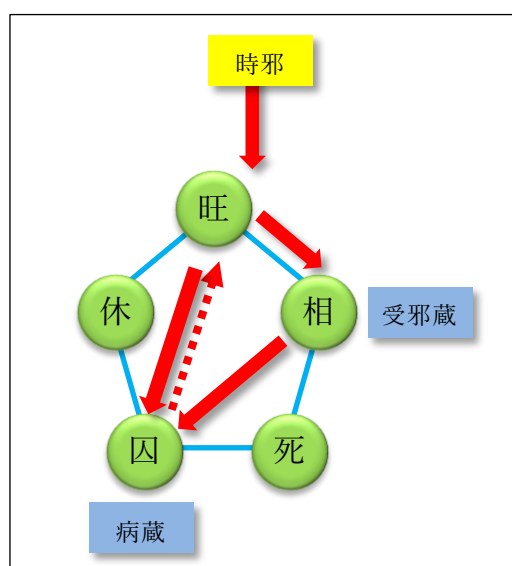
ここでも邪は明らかに外邪である。



〔病の構造〕

以上のような各々の「積」に共通したものを整理しておこう。

- 病証を表している蔵〔病蔵〕と病邪を受けた蔵〔受邪蔵〕は別である。この二蔵は、〔受邪蔵〕が〔病蔵〕を剋しているという関係にある。
- 「旺相死囚休」と表現されている季節の循環において〔受邪蔵〕はすべて「相」期に位置している。
- その〔受邪蔵〕に対して病邪となっているのは、「季節の循環局面」で「旺」期にある「季節の気＝時気」である。しかもその「時気」が最大の日柄にあるものである。これは病邪の外邪性が強いことを意味している。



- D. 「相」期にある蔵は、本来、時邪は受けにくい位置にあるのだが、それが〔受邪蔵〕になっているということは、もともとその蔵に少々問題があったことを示唆している。発症しなかったとしても、時邪をそのまま抱え続ける訳にはいかないだろうことも示している。
- E. 〔受邪蔵〕にとって病邪は、母子関係において「母」の位置にある蔵からくるもの、すなわち「後から来るもの」となるので「虚邪」である。
- F. 一方、〔病蔵〕にとっては、本来なら己が剋する位置にある蔵の性質の「気」が病邪となるのであるから、相剋関係の邪であるといっても「賊邪」ではなくて「微邪」である。
- G. 一般に、〔病蔵〕と病邪が相剋的である場合には、治癒困難である「微邪」か、死への転帰をとる「賊邪」かとなる。「積」の場合は、「微邪」の関係となり、治癒困難とされているものの方である。
- H. 〔病蔵〕は「囚」期に位置しているので、本来ならば最も病邪を受けにくい筈のものである。しかし病邪を転移している〔受邪蔵〕が〔病蔵〕を剋する関係にあるから、普通なら受ける筈もないものが邪となり得たのである。
- I. 故に「積聚」は「内傷病」的であり、「蔵病」であり、「陰病」であると言えるのである。
- J. 〔病蔵〕と病邪の関係が相剋的であるが、この場合「死への転帰をとる」とされる「賊邪」ではない。故に正しい治療によって病は次第に改善される。しかし、治癒困難なタイプのものであることは間違いない。「内傷病」的であり、「蔵病」であり、「陰病」であるから、治療を間違えて「賊邪」に転化させないように留意しなければならないものである。
- K. 〔病蔵〕が剋乗されている蔵から転移された病邪は、時邪として旺気の時期にあるものだから外邪であるが、その時期には〔病蔵〕は「囚」期の位相にあるものだから、最も病邪を受けにくい筈の位相に位置している。然るに「微邪」に傷害されている。これは〔病蔵〕が異常に弱っていたことを示している。
- L. それとともに、病は「絡病」「経病」「腑病」「臓病」の分類では「臓病」に相当するものと推測できる。

このような錯綜した複雑な関係を利用して、治療を組み立てる問題が「積」の治療ということである。

Ⅲ. 治療配穴のための前提的な事項

(1) 治療配穴への考察

イ. 時邪の処理は必ず一義的に施術する必要があるだろう。

ロ. 外邪は陽経を用いる。邪の五行性と等質の要穴を瀉す（木邪なら「井穴」）。

この場合「73難」の

「諸井者 木也：榮者 火也：火者木之子：当刺井者：以榮瀉之……」
 （諸^{もろもろ}の井^{せい}は木なり、榮^{えい}は火なり。火は木の子^{まき}：当に井を刺すものには：
 榮を以ってこれを瀉すべし……）

に従うことも良い。また、「陽経の原穴は瀉法の手技を用いれば瀉に作用し、補法の手技を用いれば補に作用する」と理解されて来ていることに従った運用も良い。

ハ. 〔受邪蔵〕の「虚邪」を〔病蔵〕に転移させて〔病蔵〕に発症させているのを、〔受邪蔵〕の陽経を瀉に用いるだけでは、病が「積」という難症であるだけに不満が残る。

この場合には、〔受邪蔵〕の陰経からも、病邪と五行的に等質の要穴の瀉法を行う。

また、腹募穴の病因に五行的と等質のもの（金邪ならば「中府」もしくは「雲門」と大腸の府の募穴「天枢」や「大巨」など）の運用も必要なこともあり得る。

また背部腧穴の外側〈例えば「肺腧」の隣の「魄戶」など〉の瀉の如し。

ニ. 基本配穴にあっては剛柔関係の運用を視野に入れておく。

ホ. 陰陽交流鍼や経別〈六合〉による蔵（特に〔病蔵〕）への働きかけ。

ヘ. 〔病蔵〕の背腧穴とその蔵の陽経の原穴の運用

ト. 八会穴や八宗穴と〔病蔵〕の経の運用

チ. 四街穴と〔病蔵〕の経の運用

リ. 配穴においては基本配穴と、補助的配穴や副次的配穴を考慮する必要がある。

(2) 病の構造と治療配穴

①病邪は〔受邪蔵〕にとっては「外邪」であり「虚邪」である。故に〔病蔵〕の陽経を用いて、病邪の五行と等質の五行穴を用いて病邪を瀉すことが適当である。「風邪」は「木邪」であるから「井穴」もしくは「滎穴」を瀉す。

②〔病蔵〕は「陰」蔵であり、侮りと剋乗の2乗的（二重）に蒙っている。故に、〔病蔵〕の背腧穴と腹部募穴をセットに運用する（陰陽交流鍼）など蔵に強力に届くとされている配穴が必要になる。それとともに〔病蔵〕の陰経の処置も必要になる。その際には最も反応の強い穴を用いることになる。

〔病蔵〕が強力に補されなければならない、その故に

- ・陰陽交流鍼
- ・経別＝六合
- ・肺腧＋それと剛柔関係にある手足経の季節穴
- ・『靈枢』官鍼第7に言う病経の季節要穴の絡刺
- ・背腧穴＋四街穴
- ・背腧穴＋〔病蔵〕および症候と関連の強い八会穴

などを効果的に運用する必要がある。また、蔵の補は食と起居が最も重要である。

③「旺」期にある蔵ではなくて、「相」期にある蔵が〔受邪蔵〕となっていることは、発病機構論から見ればスタンダードではない。故に〔受邪蔵〕には、生まれつきの体質、日常生活スタイルや生活環境、病歴、嗜好などなどに、〔受邪蔵〕となりやすい背景が想定される。

したがって〔受邪蔵〕には発症していなくても、これを補強する措置が施されるべきものである。その蔵の陰経もしくは背腧穴を運用することが適切であろう。慢性的・基礎的な問題と見られるから、腹部の調整と生理的病理的産生物の処理が重要と思われる。

④〔発症蔵＝病蔵〕は、病邪による侮りと剋乗という二重の攻撃にさらされている。しかし、病邪は〔発症蔵〕に対しては、本来、位置的な立場が弱いものであるから、〔発症蔵〕はもともと大きな問題性をかかえていたといわねばならない。故に病邪からの攻撃を蒙る機構を断ち切る処置だけでは、治療的には不足している。

「虚蔵」の克服という問題は大きな難問と言わねばならない。「病邪からの攻撃を蒙る機構を断ち切る処置」プラス「蔵虚の克服」というのが、治療問題である。

IV. 具体的な提案からの考察

1. 〔肝〕の積(=肥気)の場合

病邪は「土邪」である。〔肝〕を剋制しているのは〔肺〕であるが、〔受邪蔵〕はその〔肺〕である。〔肺〕にとって「土邪」は「虚邪」である。〔肺〕は病症を発していない。〔肺〕が受けた「土邪」を自らが剋制している〔肝〕に移転させている。

〔治療論〕

- ①病邪は〔脾〕の外邪であるから、〔肺〕の陽経である手陽明大腸経の兪穴「三間」、もしくは原穴である「合谷」を瀉す。
- ②〔肺〕が〔肝〕に邪を転移させる力を殺いでしまうために、理論的には手太陰肺経の兪土穴「太淵」を瀉すことになる。しかし病邪が「土邪」であるから「太淵」の有効性は低い。そこで、子に当たる経金穴「経渠」か、絡穴の「列缺」を瀉す。土の母に当たる「魚際」を瀉すと〔肺〕を補すことになり、〔肺〕の兪穴が補されてしまう。つまり誤治となってしまうので注意が必要である。
- ③病邪が「土邪」であるから、「三里」(胃経の下合穴)をも瀉す。〔肝〕の榮火穴「行間」を補し、〔肝〕の兪土穴「太衝」を導通に取り、〔脾〕から〔肺〕に送られている「土邪」を拒むようにする。

本来、〔肝〕(木)は「土」を剋する位置にある。故に〔肝〕が「土邪」を受けるとするのは異常な状態である。病邪を受けた時期は「土」の最盛の時節であっても、〔肝〕(木)が「土」に侮られるというのは異常なまでの〔肝〕(木)の弱さ、弱りがあることが示されている。

- ④「期門」(腹募穴)と「肝腧」(背腧穴)を取穴して陰陽交流による効果を狙う。
- ⑤〔肝〕の原穴「太衝」と〔胆〕の絡穴「光明」を用いて六合(経別)を運用する。

※④⑤は、ともに蔵に直接的に作用すると考えられている配穴である。他に「肝腧」と「気海腧」に施灸、「肺腧」を補法に取る。また蔵会である「章門」は必ず用いる。

この時期(長夏)には「太淵」の効果が低くなっている。その訳は、「土」の旺気最大の時期であるから本質的に「土邪」を瀉すのに不向きである。つまり、瀉法の影響力が「土」性の穴「太淵」に及ばないのである。

2. 〔心〕の積(=伏梁)の場合

病邪は「金邪」である。〔受邪蔵〕は〔心〕を剋制する立場にある〔腎〕であって、「金邪」は〔腎〕にとって「虚邪」である。受邪しているが〔腎〕は発症しないで、病邪(金邪)を己が剋している〔心〕に転移させている。本来、(火)は(金)を剋する立場にあるものである。〔心〕(火)が(金)に侮られている。これは〔心〕(火)が異常なまでに弱っていることを示している。

〔治療論〕

〔肝〕の積(=肥気)の場合、「太淵」を瀉法に用いても効果を期待できないように、「伏梁」の場合においても、〔旺気蔵〕と五行的に等質の「金性」穴である〔腎〕の「復溜」や〔膀胱〕の「崑崙」の効果も、同様の原理が作用するのであまり期待できない。つまり、金性の最大最強の時期に「病邪」となって〔腎〕・〔膀胱〕を傷めているからである。

3. まとめ

- A. 〔受邪蔵〕から〔病蔵〕を瀉す問題
- B. 〔剋制蔵=受邪蔵〕が病邪を転移させる力を削ぐ問題
- C. 〔病蔵〕のガード力を助ける問題
- D. 具体的な症候を緩解する問題
- E. 治療時期の時邪季邪を処理する問題
- F. 〔受邪蔵〕を強める問題
- G. 〔病蔵〕を本格的に補養する問題
- H. その他の関連問題

積聚病機一覽表

『難經』 5 6 難

積名	肥氣	伏梁	痞氣	息賁	賁豚
季節	季夏	秋	冬	春	夏
日時	戊己日	庚申日	壬癸日	甲乙日	丙丁日
旺氣藏	脾	肺	腎	肝	心
受邪藏	肺	腎	肝	心	脾
病藏	肝	心	脾	肺	腎
病邪	肺受土邪	腎受金邪	肝受水邪	心受木邪	脾受火邪
『難經』	飲食勞倦	傷寒	中湿	中風	傷暑
『內經』	湿	燥	寒	風	熱
積狀	左脇下・如覆杯 有頭足	起臍上・大如臂 上至心下	在胃脘・覆大如 盤	右脇下・覆大如 杯	發於少腹・上至 心下・若豚狀・ 或上或下無時
病候	發欬逆・痞瘧	病煩心	四肢不收・發黃 疸・飲食不為肌 膚	洒淅寒熱・喘欬 發肺壅	喘逆・骨痿少氣
發症構造					